



TITLE:

植民地ノ分類ニ就キテ

AUTHOR(S):

山本, 美越乃

---

CITATION:

山本, 美越乃. 植民地ノ分類ニ就キテ. 經濟論叢 1917, 4(3): 323-340

ISSUE DATE:

1917-03-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127182>

RIGHT:

學大科法學大國帝都京

# 叢論濟經

號三第 卷四第

行發日一月三年六正大

## 論說

資本

文學博士

內田銀藏

植民地ノ分類ニ就キテ

法、文學士

山本美越乃

支那經濟思想ノ出發點(一)

法、文學士

小島祐馬

體質廢頽問題(三)

法學博士

財部靜治

經濟心理學ノ組織的研究(三)

米田庄太郎

## 時事問題

取引所増資問題

法學博士

戸田海市

米獨斷交ト我經濟界

法學博士

小川郷太郎

毛羊問題

法學博士

神戸正雄

## 雜錄

經濟雜話(九)

法學博士

田島錦治

米國鐵道從業者八時間勞動問題

法學士

河田嗣郎

露西亞ノ國民經濟ニ於ケル歐洲的要素

法學士

米田庄太郎

維新後ノ戶數ト人口トノ關係

法學士

本庄榮治郎

あーのるど・といんびート經濟書

商學士

武藤長藏

佛蘭西財政及經濟學者バリーユー逝ク

法學博士

神戸正雄

新著紹介

## 植民地ノ分類ニ就キテ

山本美越乃

植民地ノ分類ハ植民政策上ノ諸般ノ問題ノ研究ニ重大ナル關係ヲ有シ、之ニ由リテ各植民地ノ政治上及經濟上ニ於ケル地位ヲ明カニスルト共ニ、延テ母國ノ植民地ニ對スル政策ヲ決定スルノ基礎ヲ供スルガ故ニ、之ガ研究ハ極メテ肝要ナルニ拘ハラズ、從來學者ニ依リテ比較の開却セラレツツアルガ如キ感アリ。

植民地ハ其ノ觀點ヲ異ニスルニ從ヒ種々ニ之ヲ分類スルコトヲ得ベシト雖ドモ、吾人ハ先ヅ國家ガ其ノ本來ノ國土以外ニ於テ土地ヲ保有スル形式及該地域内ニ於ケル自國々民ノ植民の活動ノ特徴ヲ標準トシテ、(一)形式上ニ於ケル分類、(二)實質上ニ於ケル分類、ノ二大區別ヲ設ケ、前者ハ更ニ之ヲ (甲)植民地 (乙)植民の保護地 (丙)租借地ノ三ニ、後者ハ (甲)原始生産の植民地 (乙)根據の植民地ノ二ニ分チ、原始生産の植民地ハ (イ)移住植民地(又ハ狹義ノ農業植民地) (ロ)放資植民地(又ハ採收植民地)ニ、又根據の植民地ハ (イ)商業的根據地(又ハ商業植民地) (ロ)軍事的根據地(又ハ軍事植民地)ニ區分スルヲ適當ト信ズ、今是等ノ分類ニ關シテ臆見ノ存スル所ヲ左ニ細說セ

ント欲ス。

## 形式上ニ於ケル植民地ノ分類

凡ソ國家ガ其ノ本來ノ國土以外ニ於テ土地ヲ保有スル形式ハ常ニ必ズシモ一樣ナラズ、假令類似ノ性質ヲ有スル土地ト雖ドモ諸種ノ理由ニ基キテ其ノ保有ノ形式ヲ異ニスルコト決シテ稀ナリトセズ、今夫等ノ形式ヲ基礎トシテ植民地ノ地域ヲ區別スル時ハ、植民地・植民地ノ保護地及租借地ノ三トナスコトヲ得ベシ。

### (甲) 植 民 地 (Colony, Kolonie od. Schutzgebiet, Colonie)

植民地トハ國家ガ其ノ本來ノ國土以外ニ於テ新タニ領有セル土地ニシテ、國法上之ヲ本來ノ國土ト同一ニ取扱フコトナク、特別ノ形式ニ依リテ統治スル地方ヲ謂フ、故ニ植民地ノ成立ニハ

(イ) 國家ガ其ノ本來ノ國土以外ニ於テ新タニ土地ヲ領有シタルコト (ロ) 國法上之ヲ本來ノ國土ト同

一ニ取扱フコトナク特別ノ方法ニ依リテ統治スルコトノ二條件ヲ必要トス、而シテ茲ニ所謂本來ノ國土トハ某國家ニ固有ノ土地ヲ稱シ、其ノ範圍ハ國法上明カニ之ヲ規定セル場合ハ勿論、假令然ラザル場合ト雖ドモ、當該國家ノ歴史の沿革・社會の組織及其ノ住民ノ一般文化の生活ノ實況

(1) 經濟論叢第三卷第五號拙稿『ころに一ノ意義ニ就キテ』參照

ヨリ推シテ考察スル時ハ、容易ニ之ヲ決定スルコトヲ得ベシ、例ヘバ露國ノ如キハ他ノ歐洲諸國トハ大ニ其ノ趣ヲ異ニシ、植民地ヲ遠ク海外ニ有セズシテ近ク國境ヲ延長スルコトニ依リテ斷エズ之ヲ擴張セントシツツアルヲ以テ、一見本來ノ國土ト植民的地域トノ區別ヲ明カニスルコト能ハザルガ如シト雖ドモ、然カモ一ト度其ノ歷史的沿革及社會的事情ノ差異ニ想到スル時ハ、何人ト雖ドモ所謂歐羅巴露西亞ヲ以テ本來ノ國土トナスニ躊躇セザルベシ。植民地トハ斯カル本來ノ國土以外ニ於テ新タニ國家ノ領有シタル土地ニシテ、國法上之ヲ本來ノ國土ト同一ニ取扱フコトナク特別ノ方法ニ依リテ統治スル地方ヲ稱ス、但シ茲ニ注意スベキハ、假令國家ガ其ノ本來ノ國土以外ニ於テ新タニ土地ヲ領有シ且之ニ對シテ特別ノ統治ヲ行フモ、若シ國法上ニ於テ明カニ該地域ヲ分離ス可カラザルモノト定メ、以テ本來ノ國土ノ一部分中ニ加フル時ハ、固ヨリ之ヲ植民地ト看做スヲ得ズ、何トナレバ斯カル場合ニハ單一國内ノ一地方ニ特別ノ必要上特別ノ統治ヲ行フト云フニ過ギズシテ、本來ノ國土以外ニ別ニ存在セル地域ナルモノヲ認メザルヲ以テナリ、例ヘバ露國ノ芬蘭ニ對スル關係ノ如キハ即チ之ニ屬ス。

(註) 一九〇六年ニ制定セラレタル露國憲法第二條ニ據レバ芬蘭ハ露西亞帝國ノ分離ス可カラザル一部分ヲ構成セルコトヲ明カニ規定シタル。——La grande principauté de Finlande, constituant une partie indivisible de l'empire de Russie, est régie dans ses affaires intérieures par des institutions particulières basées sur une législation spéciale.<sup>(2)</sup>

本來ノ國土ト國際法上ニ於テ領土又ハ版圖ト稱スルモノトハ同一ナラズ、國際法上ニ於テ領土

(1) Köbner, O. Einführung in die Kolonialpolitik, S. 40.

(2) Daresté, F. R. Les Constitutions Modernes, t. II, p. 151.

又ハ版圖トハ一國ノ領土主權 (Gebietshoheit) 又ハ對地主權 (Territorialhoheit) ノ行ハルル全領域ヲ稱スルガ故ニ、植民政策上ニ所謂母國(即チ本來ノ國土)及植民地ノ全體ヲ包括スルモノタリ、一國ノ版圖ハ或ハ本來ノ國土即チ固有ノ一體ヨリ成ルコトアリ、或ハ散在セル各部即チ植民地ヲ包容スルコトアリト雖ドモ、國際法上ニ於テハ之ヲ總括シテ領土又ハ版圖ト稱シ、敢テ其ノ成立狀態ヲ問フコトナシ<sup>(1)</sup>。

國家ガ其ノ本來ノ國土以外ニ於テ新タニ土地ヲ領有スルハ、或ハ先占・時効等ノ國際法上ニ所謂原始的原因 (acquisitio originaria) ニ基クコトアリ、或ハ然ラズシテ賣買・交換・割讓・贈與等ノ繼受的原因 (acquisitio derivativa) ニ出ヅルコトアリト雖ドモ、(就中先占・賣買及割讓ノ三者ハ古來植民地擴張ノ最大原因ヲ成セリ)、其ノ原因ノ如何ハ茲ニハ重要ナル問題ニ非ズ、要ハ唯是等ノ原因ニ由リテ事實上一定ノ地域ヲ領有シ、此處ニ母國ノ主權ヲ延長スルヲ得バ足ルノミ。

斯カル土地ヲ國法上本來ノ國土ト同一ニ取扱フコトナクシテ特別ノ方法ニ依リテ統治スル所以ハ、或ハ文化ノ程度及歴史ノ發達ヲ異ニセルヨリ、或ハ民情・風俗・習慣等ニ著シキ相違アルヨリ、或ハ氣候・風土・位置等ノ地理的關係及社會的又ハ經濟的ノ事情ヲ一ニセザルヨリ、之ガ統治ヲ全ク本來ノ國土ト同一ニ爲ス可カラザル特別ノ事由存スルニ因ル、故ニ若シ斯カル特殊ノ事情ナカリセバ、植民地ハ國際法上ニ於テハ固ヨリ、國法上ニ於テモ亦本來ノ國土ト合體シテ完全ナ

(1) 高橋博士『平時國際公法』二七一頁、千賀博士『國際公法要義』二六三乃至二六四頁、遠藤博士『國際法要論』一二四乃至一二五頁、松原一雄氏『最近國際公法原論』九二乃至九三頁。  
Hall, W. E. A Treatise on International Law (6th ed.), p. 101.  
Martens, F. Völkerrecht, Bd. I, S. 343-44.  
Liszt, F. Das Völkerrecht, 3. Aufl. § 9. III.  
Ullmann, E. Völkerrecht, 2. Aufl. § 79.

ル共通の一體ヲ組織シ得ベキモノタリ、(註)是レ植民地ノ植民の保護地及租借地ト異ナレル主要ナル點ナリトス。

(註) 植民地ハ假令特別ノ方法ニ依リテ統治セラルルモ、此處ニ行ハルル主權ハ固ヨリ母國ノ主權ニシテ、植民地自ラ獨立ノ主權ヲ有スルモノニ非ズ、植民地中ニハ其ノ發達或程度ニ達ヘル時ハ文明國ノ範ニ倣ヒテ、自己ノ憲法ヲ有スルニ至ルコト從來其ノ例ニ乏シカラズ、例ヘバ英領加奈太ハ一八六七年ニ、濠太刺利亞ハ一九〇〇年ニ、英領南亞弗利加ハ一九〇九年ニ所謂植民地憲法トモ稱スベキモノヲ制定シタリト雖ドモ、之ヲ以テ直チニ植民地モ亦自己ノ獨立ノ主權ヲ有スルガ如クニ思考スルハ誤レリ、斯カル場合ニ於ケル所謂植民地憲法ナルモノハ、實ハ一種ノ植民地自治規定ノ宣言ニ過ギズシテ、之ガ制定ハ固ヨリ母國主權者ノ裁可ヲ經ベキモノタリ。

獨逸ニ於テハ植民地ハ一般ニ之ヲ保護地 (Schutzgebiet) ト稱スルガ故ニ、一見後ニ述ブベキ植民の保護地 (Koloniales Protektorat) ト混淆スルノ虞レナキニ非ズト雖ドモ、獨逸ノ保護地ナルモノハ其ノ實質ニ於テハ茲ニ所謂植民地ニ他ナラズ、獨逸ガ植民地ニ對シテ特ニ此ノ如キ名稱ヲ用キタル所以ハ、其ノ植民の活動ノ當初ニ於ケル植民地ノ特質ニ原因スルモノタリ、即チ一八八四年以前ニ在リテハ獨逸政府ハ殊ニ英國ニ對スル關係ヲ顧慮シテ、海外各地ニ於ケル獨逸國民ノ發展ニ關シテハ單ニ保護ヲ加フルニ止メ、他國ノ如クニ自ラ植民地ヲ領有シテ直接之ヲ統治セントスルガ如キコトヲ避ケ、唯海外ニ於ケル自國民ノ活動ヲ保護シ得ル程度ニ於テ諸般ノ施設ヲ爲シタルニ過ギズ、斯カル思想ハ一八八四年四月獨逸政府ガ南亞弗利加ニ對シテ、積極のニ植民

的ノ活動ヲ開始シタル時ヲ以テ全ク終リテ告ゲタリト雖ドモ、獨リ當初ノ用語ノミハ現今ニ至ルモ尙ホ存續襲用セラルルモノナリトス。<sup>(1)</sup>

## (乙) 植民的保護地 (Colonial Protectorate, Koloniales Protektorat,

Protectorat colonial)

國法上及國際法上ヨリ觀察セル植民地ノ地位ハ比較的簡單ナリト雖ドモ、保護地及租借地ニ關シテハ幾多ノ錯綜セル問題ヲ生ジ、假令實際上ニ於テハ殆ンド植民地ト異ナルコトナキ狀態ニ在ルモ、法理上ニ於テハ疑問ヲ挾ミ得ベキ餘地渺ナシトセズ。之ヲ過去ニ於ケル保護的關係ノ發生ノ原因ニ就キテ考フルモ、凡ソ保護關係ノ成立ニハ四ノ場合アリ。

其ノ一ハ完全ナル主權ヲ有スルモ國力微弱ナルガ爲メニ列國間ニ伍シテ獨立ヲ維持スルコト困難ナルガ如キ弱國ニ對シテ、勢力ノ均衡ヲ保ツノ必要ヨリ、他ノ強國ガ其ノ獨立自主ノ權ヲ害スルコトナクシテ之ヲ擁護セントスル場合ニ起ルモノニシテ、伊太利ノさん・まりのニ對シ合衆國ノきゅうばニ對スル關係ノ如キハ之ニ屬ス。

其ノ二ハ完全ナル主權ヲ有スルモ自ラ之ヲ行使スルノ能力ヲ缺ケル國ニ對シテ、利害關係ヲ有スルコト最モ深キ強國ガ代リテ其ノ主權ノ一部ヲ行フ場合ニ起ルモノニシテ、前者ト異ナル點ハ

(1) Köbner, a. a. O. S. 13.



弱國ノ主權ノ一部殊ニ外交及軍事ニ關スル權ヲ保護國タル強國代リテ之ヲ行フニ在リ、嘗テ佛國ノまだがすかるニ對シ我が國ノ韓國ニ對シテ有シタル關係ノ如キ、又現ニ佛國ノちゅーにすニ對シテ有スル關係ノ如キハ之ニ屬ス。

其ノ三ハ強國ガ弱國ノ主權ヲ事實上ニ於テハ全ク收メツツアルモ、單ニ政略上ヨリ從來ノ君主ヲシテ其ノ虛位ヲ擁セシメ、強國ノ指揮ノ下ニ政務ヲ執行セシムル場合ニ起ルモノニシテ、印度ニ於ケル土民ノ王國ニ對スル英國ノ關係ノ如キハ之ニ屬ス。

其ノ四ハ未ダ國家的ノ組織ヲ有セザル野蠻未開ノ地方ニ對シテ最初ハ保護ノ名目ノ下ニ強國ノ勢力ヲ扶植シ、漸次之ヲ自國ノ領土ノ一部分中ニ加ヘントスル場合ニ起ルモノニシテ、亞弗利加内地ニ於ケル蠻族ノ棲息地ニ對スル歐洲諸國ノ保護關係ノ如キハ之ニ屬ス。

(註) 野蠻未開ノ種族ノ棲息セル地方ニ於テ歐洲諸國ガ其ノ酋長等ト保護條約ヲ締結スルハ單ニ一時ノ方便ニ過ギズシテ斯カル地方ハ久シカラズシテ其ノ領有ニ歸スルモノナリ、英國ハ此ノ方法ヲ用ヒテ中部亞弗利加殊ニこんごー地方ニ多クノ土地ヲ得、獨逸モ亦此ノ方法ニ依リテ僅々數週開内ニ東部亞弗利加ニ約五萬方哩ノ土地ヲ獲タリ、故ニ未開地ニ於ケル保護關係ノ開始ハ其ノ名ハ保護ト稱スルモ、其ノ實ハ直チニ植民地ノ獲得ト看做シ得ベキ場合多シ。

以上四種ノ保護關係中、第一ノ場合ハ各國間ニ勢力ノ均衡ヲ保ツノ必要ヨリ特ニ之ヲ保護セントスルモノナルガ故ニ、戰爭其ノ他ノ突發的事變ノ爲メニ此ノ均衡ヲ破壞セラレザル限リハ、固ヨリ植民政策上ノ問題ヲ生ゼシムルノ餘地ナシト雖ドモ、第二・第三及第四ノ場合ハ之ニ反シテ

(1) Reinsch, P. S. Colonial Government, p. 112.  
(2) 有賀博士『保護國論』一乃至四及一七五乃至一八三頁、千賀博士(前出)九〇乃至九五頁、遠藤博士(前出)八一乃至九一頁、中村博士『國際公法論』一八九乃至一九八頁、松原氏(前出)一一乃至一八頁、Martens, a. a. O. S. 250 ff. Hall, International Law, pp. 125-129. Stengel, C. Deutschen Schutzgebiete, S. 11-16. Westlake, J. International Law, part I, pp. 21-24. Gairal, F. Le Protectorat International, pp. 49-67 et 267-270.

早晚植民地トシテ保護國ノ支配ヲ受クルニ至ルベキ運命ヲ有スルモ、唯政治上ノ諸種ノ關係ヨリ一時之ヲ保護地トシテ自國ノ勢力ノ下ニ置クモノ多キニ居ルヲ以テ、純然タル植民地ニ次デ植民政策上重要ナル地位ヲ占ムルモノハ實ニ此ノ種ノ保護地ナリトス、故ニ吾人ハ是等三種ノ保護地ヲ總括シテ之ヲ『植民の保護地』ト稱シ、從來學者ニ依リテ往々第四ノ場合ニノミ使用セラレタル此ノ語ノ意義ヲニ擴張シテ、<sup>(1)</sup>少クトモ植民政策上ニ於テハ第二及第三ノ場合ヲモ併セテ包含セシムルヲ適當ト信ズ。

要スルニ植民政策上ニ於テ所謂植民の保護地トハ、一國又ハ一地方(野蠻未開ノ種族ノ棲息地ノ如クニ未ダ國家的ノ組織ヲ有セザル場合ニハ)ガ他ノ強國ニ對シテ從屬的ノ關係ニ立チ、外交及軍事ハ勿論往々其ノ内政ニ關シテモ當該強國ノ保護ヲ受ケ、從テ其ノ國ノ勢力ノ漸次扶植セララルニ至ル土地ヲ謂フト解スルコトヲ得ベシ。

植民の保護地ニ對スル保護ノ程度ハ各場合ニ於ケル條約又ハ協約ニ據リテ定マルガ故ニ、一般のニ之ヲ論ズルコト能ハズト雖ドモ、其ノ程度如何ハ敢テ重大ナル問題ニ非ズ、要ハ某國ガ他國又ハ他地方ヲ保護シテ其ノ施政ニ關與スルノ結果此處ニ自國ノ勢力ヲ扶植シ、終ニハ之ヲ一植民地ノ如クニ看做シテ取扱フニ至ルノ事實アレバ足ル。唯茲ニ注意スベキハ植民地ハ自ラ國家的ノ存在ヲ保ツコトナク、全ク母國ニ隸屬シテ其ノ領土ノ一部分ヲ成スガ故ニ、國際法上ニ於テハ

(1) 有賀博士(前出)三乃至四頁、Lawrence, T. J. The Principles of International Law (4th ed.), p. 169. Westlake, International Law, part I, p. 122.

固ヨリ國法上ニ於テモ毫モ獨立ノ主權ヲ有スルモノニ非ズト雖ドモ、植民の保護地ハ未ダ全ク國家的ノ存在ヲ失ナハザルガ故ニ（野蠻未開ノ種族ノ棲息地ニシテ最初ヨリ國家的ノ存在ヲ有セザルモノハ之ヲ別トシ）、假令條約又ハ協約上ノ制限ヲ受クルモ尙ホ固有ノ主權ハ之ヲ喪失セザルコト是レナリ。

植民の保護地ノ保護國ニ對スル權利義務ノ關係ハ各場合ノ事情ニ應ジテ一樣ナラズト雖ドモ、特別ノ事情ノ存セザル限りハ通常左ノ共通の關係ノ存スルヲ見ル。

(イ) 植民の保護地ハ保護國以外ノ他國ト直接外交上ノ交渉ヲ爲スコトヲ得ズ、從テ他國ニ對シテ自ラ宣戰講和ヲ爲スノ權ヲ有セズ。

(ロ) 植民の保護地ノ內政機關及法律・習慣・制度等ハ成ルベク之ヲ保存シ、唯保護國ノ利益ト相容レザル場合ニノミ之ニ變更ヲ加フ。

(ハ) 植民の保護地ニハ保護國政府ノ代表者ヲ置キ主トシテ外政ヲ掌ラシムルモ、必要アル場合ニハ自ラ內政ニモ關與シ殊ニ其ノ財政上ニ一大勢力ヲ有ス。

(ニ) 植民の保護地ノ軍隊ノ編成ハ保護國ノ指揮ヲ受クルコトヲ要ス、從テ保護國ハ外敵ニ對シテハ保護地ヲ防衛スルノ義務アリ。

(ホ) 植民の保護地ハ其ノ必要ニ應ジテ保護國ヨリ財政上ノ援助ヲ受ク。

植民の保護地ハ前述ノ如ク假令他國ノ保護ヲ受クルモ自己ノ存在ハ尙ホ未ダ之ヲ失ナハザルガ故ニ、理論上ヨリセバ植民地統治ノ機關ヲシテ斯カル地方ニ對スル政務ヲ管掌セシムベキニ非ズト雖ドモ、實際上ニ於テハ其ノ狀態植民地ト大差ナキ場合ニハ、植民地統治ノ機關ヲシテ之ヲ統轄セシムルコトナキニ非ズ、例ヘバ安南・かむぼでい等ノ如キハ佛國ノ植民の保護地ナルヲ以テ、是等ノ地方ニ對スル政務ハ同一ノ關係ニ立テルチヨリニ對スル政務ト同ジク、本來外務省ノ所管ニ屬セシムベキモノナリト雖ドモ、佛國政府ハ便宜上之ヲ植民省ノ統轄ニ歸セシムルガ如キ是レナリ。

植民の保護地ハ漸次發達シテ完全ナル國際法上ノ一主體ト成ルヨリハ、寧ロ反對ニ全ク保護國ノ主權ノ下ニ服從シテ其ノ一植民地ト成ル場合多キヲ以テ、一般的ニ之ヲ論ズル時ハ保護權ノ設定ハ領土擴張ノ一階段ト稱スルモ不可ナシ、然レドモ斯カル一般の傾向アルヨリ直チニ植民の保護地ハ將來必ズ植民地ト成ルモノノ如クニ速斷スルハ謬レリ、蓋シ保護關係ノ下ニ於テハ保護國ノ財政上ノ負擔及政治上ノ責任ハ比較的輕微ナリト雖ドモ、一朝之ヲ植民地ト成ス時ハ母國トシテ自ラ全然是等ノ重荷ヲ負ハザル可カラザルト、又植民の保護地ノ方面ヨリ觀察スルモ、其ノ住民等ハ他國ノ植民地トシテ支配セラレンヨリハ保護ノ名目ノ下ニ從來ノ狀態ヲ持續センコトヲ冀フベキハ當然ナルガ故ニ、植民地ト成スヨリモ寧ロ植民の保護地トシテ之ヲ保有スルノ保護國

ニトリテ往々有利ナル事情存スルアルヲ以テナリ、是レ先進植民國ガ實質上ニ於テハ植民地ト毫モ異ナルコトナキニ拘ハラズ、形式上ニ於テハ現今ト雖ドモ尙ホ植民的保護地トシテ廣大ナル地域ヲ世界ノ各地ニ保有スル所以ナリトス。<sup>(1)</sup>

〔註〕現今各國ノ保有セル植民的保護地ノ全面積ハ約四百九十五萬方哩、人口一億八千二百萬人餘ニシテ、其ノ主ナルモノハ左ノ如シ。(英)あふがにすたん・べるちすたんノ土民王國、バレーいん諸島、北ぼるねノ土民王國、ブーたん・印度土民王國・馬來聯合諸州・べちやあならんど・埃及ないじみりあ・さんじぼる・すいだん・すわじらん・ごうがんだ・もんが等、(佛)安南・かむぼでいあ・らなす・もろつこ・ちゅうにす等、(蘭)東印度及馬來諸州ノ土民王國、(露)ぼかいら・きーゲあ等、(伊)そまりーらんど、(米)りべりあ。

## (丙) 租借地 (Leased Territory, Pachtgebiet, Territoire cédé à bail)

租借地トハ一國ガ他國ノ領土ノ一部分ヲ條約ニ據リテ借受ケ、自國ノ統治機關ヲシテ之ヲ統治セシムル地域ヲ謂フ、而シテ其ノ借受ケハ或バ比較的短期ナルコトアリ(露國ガ海軍ノ安全ヲ謀ル爲メニ旅順口及大連灣ヲ二十五箇年間租借シタルガ如シ)、<sup>(2)</sup>或ハ然ラズシテ長期ナルコトアリ(獨逸ガ海軍ノ根據地及貯炭所造船所等ヲ設置センガ爲メニ膠州灣附近ヲ九十九箇年間租借シタルガ如シ)<sup>(3)</sup>ト雖ドモ、其ノ期間ノ長短ハ敢テ之ヲ問フノ要ナク、唯強國ガ弱國ノ領土ノ一部分ヲ借受ケ此處ニ將來ノ發展ノ根據ヲ置カントスル目的ヲ以テ諸般ノ施設ヲ爲ス時ハ、該地域ハ之ヲ

(1) 東亞經濟調査局『國際法上ニ於ケル保護領ニ就テ』五頁以下、  
 (2) 一八九八年露清兩國間ニ締結シタル關東州租借條約第一款、第三款、  
 (3) 同年獨清兩國間ニ締結シタル膠州灣租借條約第一款、第二款、

植民地ニ準ズベキモノトシテ取扱フヲ妨ゲズ、何トナレバ一國ガ他國ノ領土ノ一部分ヲ借受グ之ヲ自國ノ統治權内ニ置ク時ハ、貸與國ノ該地域ニ對スル主權ハ之ガ爲メニ大ナル制限ヲ受ケ、少クトモ租借期間内ハ事實上租借國ガ其ノ本來ノ國土以外ニ於テ新タニ領有シタル土地ト殆ンド同一ノ關係ヲ立テ、貸與國ノ主權ハ有レドモ無キガ如キ狀態ニ存スルヲ以テナリ、是レ學者間ニ租借ヲ以テ領土ノ割讓ノ一種ニ過ギズトナス説ヲ生ズルニ至レル所以ナリ、此ノ如キ借地ニ因ル對地主權ノ制限ハ中世以來一時廢絶セシガ、近時歐洲列強諸國ハ主トシテ東洋ニ於テ此ノ制度ヲ復活スルニ至レリ、前掲露清條約ニ據ル關東州租借(日露戰爭ノ結果ハ一つます條約第五條及第六條ニ據リテ此ノ權利ハ我ガ國ニ讓渡セラル)・獨清條約ニ據ル膠州灣租借・一八九八年ノ英清條約ニ據ル威海衛及九龍灣租借・同年佛清條約ニ據ル廣州灣租借ノ如キハ之ガ適例タリ。<sup>(3)</sup>

等シク領土ノ租借ト稱スルモ其ノ目的ハ必ズシモ同一ナラズ、或ハ之ニ依リテ某地方ニ於ケル他國ノ勢力ヲ牽制シテ關係各國間ノ勢力ノ均衡ヲ保チ、以テ平和ヲ維持セントスル目的ニ出ヅルコトアリ、或ハ然ラズシテ單ニ將來ノ發展ノ根據地ヲ得ントスル目的ヨリ一定ノ地域ヲ租借スルコトアリ、例ヘバ英國ノ威海衛及九龍灣ヲ租借シタルガ如キハ前者ニ屬シ、獨逸ノ膠州灣・露國ノ關東州・佛國ノ廣州灣ヲ租借シタルガ如キハ後者ニ屬ス、而シテ租借地中所謂準植民地ヲ以テ目セラルベキモノハ前者ヨリハ寧ロ後者ニ在リ。

(1) 總川博士『南滿州ニ於ケル帝國ノ權利』第一章第一節、Lawrence, International Law, p. 177.

(2) Martens, a. a. O. S. 364-5.

(3) Treaties between China and Foreign States, vols. I and II.

既ニ一言セルガ如ク租借ノ性質ニ關シテハ從來國際法學者間ニ異說存シ、或ハ之ヲ以テ外交上ノ令辭ヲ用キタル領土ノ割讓ノ一種ニ他ナラズトナス說ナキニ非ズト雖ドモ、條約上ノ租借ト領土ノ割讓トハ法理上之ヲ同視ス可カラザルノミナラズ、實際上ニ於テモ亦租借地ニ關スル權利ヲ他ニ移轉セントスル場合ニハ貸與國ノ同意ヲ經ルノ形式ニ依ルコトハ、現ニほゝつます條約第五條ニ於テモ明カニ之ヲ認ムル所ナルヲ以テ、吾人ハ此ノ說ニ贊スルコト能ハズ。

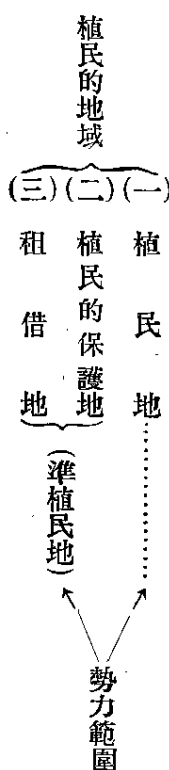
(2) ほゝつます條約第五條ニ露國政府が旅順口・大連并ニ其ノ附近ノ租借權ヲ日本政府ニ移轉スルニ當リ清國政府ノ承諾ヲ經ルコトヲ條件トナセルハ法理上徒ラニ無用ノ手續ヲ爲シタルモノニ過ギズトノ反對說ニ就キテハ總川博士著『南滿洲ニ於ケル帝國ノ權利』第一章第二節ヲ參照。

租借條約ニ據リ一國ガ他國ノ領土ノ一部分ヲ借受ケタル場合ニハ、其ノ租借期間中ハ貸與國ハ當該地域ニ對シテ主權ヲ行使スルコト能ハズ、換言セバ租借地ノ統治ハ擧ゲテ之ヲ租借國ニ歸セシムルヲ常トシ、此ノ關係ハ啻ニ平時ニ於テノミナラズ戰時ニ在リテモ亦毫モ變更ヲ受クルコトナシ、蓋シ之ヲ租借國ノ方面ヨリセバ平時及戰時ヲ通ジテ該地域ヲ自由ニ使用セントスルハ租借ノ本來ノ目的タルト共ニ、又貸與國ノ方面ヨリスルモ租借國ガ後日該地域ヲ戰爭ノ目的ニ向テ使用シタル場合ニ、自ラ中立違反ノ責ニ任ゼザル可カラザルガ如キコトハ到底忍ブ能ハザル所ナルヲ以テナリ、之ヲ實例ニ徵スルモ日露及日獨戰爭ニ於テ旅順・大連及膠州灣ハ戰爭ノ目的ニ向テ使用セラレタリト雖ドモ、之ガ爲メニ貸與國タル支那ハ中立違反ノ責ニ任ズルコトナシ、斯カル

(1) 外務省編再訂條約彙纂七八四乃至七八五頁、

觀點ヨリセバ租借地ニハ租借期間ノ存續中ハ租借國ノ主權ノ絶對的ニ行ハルコトヲ知ルヲ得ベク、既ニ平時及戰時ヲ通ジテ租借國ノ主權ノ絶對的ニ行ハル以上ハ、實際上ニ於テハ租借國ノ領土ト殆ンド異ナル所ナキガ如シト雖ドモ、此ノ事實ヨリ推シテ直チニ租借條約ノ締結ハ外交上ノ令辭ヲ用キタル領土ノ割讓ニ他ナラズト解スルハ、政治論トシテノ可否ハ姑ク之ヲ措キ法理上ノ見解トシテハ正鵠ヲ得タルモノト稱スルヲ得ズ、故ニ吾人ハ租借ハ領土ノ割讓ニモ非ズ又貸與國ノ委任ニ因ル統治權ノ行使ニモ非ズシテ、全ク條約ニ基キ他國ノ領土ノ一部分ニ對シテ自國ノ統治權ヲ行使スルコトヲ得ル特殊ノ制度ナリト解スルヲ至當ト信ズ、是レ吾人ガ租借地ヲ以テ純然タル植民地(領土)中ニ加ヘズシテ、前掲植民地の保護地ト共ニ準植民地(準領土)トシテ別ニ之ヲ分類セントスル所以ナリ。

以上説述セル吾人ノ所謂形式上ニ於ケル植民地ノ分類ヲ簡單ニ表示セバ左ノ如シ。



(附) 勢力範圍(又ハ利益範圍) (Sphere of Influence or Interest, Interessensphäre, Sphère ou Zone d'influence)

(1) 千賀博士(前出)二九一乃至二九二頁、中村博士(前出)一〇一乃至一〇四頁、  
遠藤博士(前出)二二四乃至二三八頁、松原氏(前出)一二三乃至一二六頁、  
Lawrence, International Law, pp. 175-179.  
Westlake, International Law, pp. 135-136.  
Martens, a. a. O. S. 364 ff.



形式上ニ於ケル植民地ノ分類ヲ終ルニ蒞ミ茲ニ附説スベキハ勢力範圍(又ハ利益範圍)ナルモノノ植民政策上ヨリ觀察セル地位如何ノ問題はレナリ、抑モ勢力範圍トハ某國ガ或地方ニ自國ノ勢力ヲ扶植セントスルニ當リ未ダ實力上ノ先占ヲ爲サザルニ先ダテ、該地方ヲ將來自國ノ先占地又ハ保護地ト成サントスル希望アルコトヲ他國ニ通告又ハ宣言スルコトニ依リテ、同一地域内ニ於ケル各國ノ勢力ノ衝突ヲ避ケントスル地域ヲ稱ス、勢力範圍ノ一般的ノ意義ハ此ノ如シト雖ドモ植民政策上ニ所謂勢力範圍ナルモノハ多少此ノ意義ヲ限定シ、唯漠然某地方ヲ將來自國ノ先占地又ハ保護地ト成サントスル希望アルコトヲ他國ニ通ズルニ非ズシテ、斯カル將來ノ先占地又ハ保護地ガ現ニ自國ノ勢力ノ扶植セラレツツアル植民地又ハ準植民地ニ接近シテ存在スル場合ヲ稱ス、此ノ意義ニ於ケル勢力範圍ハ既占地域ト何等ノ關係ヲ有セザル孤立的ノ一地方ヲ指示スルニ非ズシテ、既ニ自國ノ勢力ノ扶植セラレツツアル地域ノ周圍若クハ其ノ背後ノ地方ヲ指スモノナルガ故ニ、國際法上ニ所謂ひんたーらんど(Hinterland)ノ一種ニ他ナラズ。

(註) ひんたーらんどニ關シテハ嘗テ『沿岸ノ一地方ヲ先占スル時ハ其ノ效力ハ當然背後地ニ及ブ』トノ所謂ひんたーらんど主義ナルモノ行ハレタルコトアリ。<sup>(1)</sup> 土地ノ占領ニ關スル準則ヲ設クルニ至リタルハ比較的近時ノコトニ屬シ往時ハ單ニ形式的ニ或行爲ヲ爲セバ足レルモノトセリ、例ヘバ英國ハ一四九六年セバすちあん・カボット (Sebastian Cabot) ガ其ノ乗船上ヨリ北米ノ沿岸ノ一部ヲ望見シタリトノ理由ニ基キテ該大陸全部ヲ發見セルモノノ如クニ看做シテ其ノ先占ヲ主張シ、又西班牙ノ南米ヲ占領シタルガ如キモ形式的ノ行爲ニ依リ該地方ニ國旗ヲ掲揚シテ先占ノ宣言ヲ爲シタルモノナリ、然ルニ歐洲列

(1) 高橋博士(前出)三九三乃至三九六頁、遠藤博士(前出)一九五乃至一九七頁、中村博士(前出)九四頁、Walker, T. A. Manual of Public International Law, pp. 30-31.  
(2) Martens, a. a. O. S. 351.

國間ニ植民地獲得競争ノ盛ナリシ當時ニ在リテハ沿岸ニ土地ヲ占領シタル者ハ假令奥地ニ入ラザルモ共ニ之ヲ占領シタルモノナリト云フガ如キひんたーらんど主義ノ實行ハ、殊ニ亞弗利加ニ於テ各國間ニ紛争ヲ醸スノ原因トナルコト多カリシカバ、列國ハ遂ニ土地ノ占領ニ關スル一定ノ準則ヲ設クルノ必要ヲ感ジ一八八五年ニ所謂「キンギー條約」ナルモノヲ制定スルニ至リ、該條約ニ據レバ新タニ土地ヲ占領シ若クハ保護權ヲ設定シタル場合ニハ列國ニ之ヲ通告スベク、單純ナル形式ノ占領行爲ノミニテハ未ダ其ノ先占ヲ確認セシムルノ效力無キモノトナセリ。

勢力範圍ノ性質此ノ如シトセバ、斯カル地方ヲ前ニ述べタル植民地又ハ準植民地ト同一視スベカラザルヤ明カニシテ、勢力範圍ノ設定ハ唯將來植民地又ハ準植民地ト成サントスル目的ヲ以テ、某地方ニ對シテ國際法上必要ナル準備ノ行爲ヲ爲シタルニ過ギズ。<sup>(1)</sup> 勢力範圍ハ未ダ一國ノ領土ヲ構成セザルハ勿論、植民の保護地又ハ租借地ノ一種ニモ非ザルガ故ニ、積極的ニ統治機關ヲ設ケテ之ヲ統治スルヲ得ズ、唯消極的ニ他國ノ政治的勢力ノ進入ヲ排斥シ得ルニ止マル、然レドモ當該地域内ニ於ケル公安ヲ維持シ、其ノ住民ノ生命財産等ノ安固ヲ保障セント欲セバ、斯カル消極的ノ排他的權利(jus excludendi alium)ノミヲ以テハ到底完全ニ其ノ目的ヲ達スルコト能ハザルガ故ニ、早晚該地域ニ對スル積極的干涉ノ必要ヲ生ゼシメ、其ノ結果先ヅ之ヲ植民の保護地トナシ、然ル後徐々ニ植民地トシテ自國ノ領土中ニ加フルニ至ルヲ普通ノ順序トス、彼ノ亞弗利加ニ於ケル各國ノ植民地ノ如キハ之ガ好例ナリ。<sup>(2)</sup>

(註) まるてんす曰ク文明諸國ガ野蠻人ノ棲息地ニ對シテ常ニ罪惡ヲ行ヒ、文明國タリ基督教國タルノ名ヲ辱シメザル正義ヲ遂行シタルコト極メテ稀ナルハ周知ノ事實ナリ、彼等ハ多クノ場合ニハ自國ノ探險者ガ野蠻人ノ棲息地ニ於テ或行爲ヲ爲ス

(1) Köbner, a. a. O. S. 14.  
 (2) 松原氏(前出)一一八乃至一二二頁、高橋博士(前出)三九七頁以下、  
 Lawrence, International Law, pp. 173-174.  
 Hall, International Law, pp. 129-131. Westlake, International Law, pp. 130-134.  
 Liszt, a. a. O. S. 77-78. Reinsch, Colonial Government, part II, chap. VII.  
 Bonfilis, H. Manuel de Droit International Public, 1905, pp. 316-319.  
 Köbner, a. a. O. S. 15. Stengel, a. a. O. S. 17-18.

時ハ之ヲ以テ直チニ其ノ地方ヲ自國ノ有ニ歸シタルモノト看做シタルコトハ過去ニ於ケル植民歴史ノ明カニ示ス所ナリト。(1)

之ヲ植民政策上ノ觀點ヨリセバ、過去ニ於テハ勢力範圍ハ一國ノ植民の膨脹ニ最モ重大ナル關係ヲ有シタリト雖ドモ、近時ハ次第ニ其ノ重要ノ度ヲ減ジツツアルヲ見ル、是レ蓋シ今ヤ地球上ニ於テ利用シ得ベキ土地ノ大部分ハ殆ソド各國ノ分有ニ歸シ、勢力範圍トシテ互ニ其ノ主權ノ擴張ヲ爭ヒ得ベキ餘地極メテ狹少トナルニ至レルヲ以テナリ。

最後ニ、從來ノ用例ニ從ヘバ勢力範圍ナル語ハ時トシテハ極メテ漠然タル意義ニ使用セラルルコトヲ注意スルノ要アリ、例ヘバ亞細亞ニ於ケル各國ノ勢力範圍ナルモノハ往々各國ガ任意ニ其ノ範圍ヲ定メテ斯ク稱スルニ過ギズシテ、關係諸國ノ公認ヲ經タルモノニ非ザル場合甚ダ多シ、彼ノ英國ハ南部ベるしや地方ヲ又露國ハ北部ベるしや地方ヲ各自國ノ勢力範圍ナリト稱スルモ、是等ハ明確ニ其ノ勢力ノ及ブベキ範圍ヲ劃定シテ之ヲ各國ニ通告セルモノニ非ザルガ故ニ、嚴密ナル意義ニ於テハ勢力範圍ト稱スルヲ得ザルガ如キ是レナリ。(2)

殊ニ甚シキハ支那ニ於テモ亦各國ハ屢々自國ノ勢力範圍ナルモノヲ設ケ(支那ノ場合ニハ勢力範圍“Sphere of Influence”ト謂ハンヨリハ寧ロウゑすとれーキ氏ノ言ヘルガ如ク利益範圍“Sphere of Interest”ト稱スルノ名實相適ヘルガ如シ)、互ニ他國ノ勢力ヲ排斥シツツアリト雖ドモ、現ニ一國ノ領土ノ一部分ヲ構成セル土地ハ之ヲ先占等ノ目的物トナシ得ベカラザルハ明カニシテ、從テ

(1) Martens, a. a. O. S. 353

(2) Reinsch, Colonial Government, pp. 105-106.

前述ノ意義ニ於ケル勢力範圍ナルモノヲ他國ノ領土内ニ設定セントスルガ如キコトアラバ、這ハ其ノ國ノ領土主權ニ對スル一大侮辱ト稱セザルヲ得ズ、故ニ支那ニ於テ所謂各國ノ勢力範圍トハ要スルニ支那ガ某國ニ對シテ將來他國ニ割譲スルガ如キコトナカルベキヲ約シタル一定ノ地域ヲ謂フニ過ギズト解スルヲ適當トス、例ヘバ英國ハ楊子江沿岸ヲ、佛國ハ南清ノ三省即チ廣東・廣西及雲南ヲ、又我が國ハ福建ヲ各自國ノ勢力範圍ナリト稱スルガ如キ是レナリ、然レドモ此ノ種ノ勢力範圍ノ境界ハ頗ル不明確ニシテ恐クバ當事國ト雖ドモ其ノ範圍ヲ明カニ指示スルコト能ハザルベシ、此ノ如ク支那ニ於ケル各國ノ勢力範圍ナルモノハ特別ノ性質ヲ有シ、普通ノ勢力範圍ノ如クニ某地方ニ對シテ勢力ヲ扶植セントシツツアル競争國相互ノ間ニ條約ヲ締結シテ其ノ地域ヲ劃定セルニ非ズシテ、單ニ要求國ト支那本國トノ間ニ於ケル特別ノ協約ニ依リテ之ヲ定ムルモノナルガ故ニ、法理上ヨリセバ第三國ハ斯カル協約ニ依リテ直接拘束ヲ受クルコトナシ、唯各國ハ支那及要求國ニ對スル國際道義上ヨリ之ヲ尊重シテ互ニ相侵サザランコトニ注意スルニ過ギザルナリ。

(附言) 以上ノ『形式上ニ於ケル植民地ノ分類』ニ對スル『實質上ニ於ケル植民地ノ分類』ニ關シテハ他日稿ヲ改メテ別ニ政究スル所アラント欲ス。

(1) 遠藤博士(前出)一八二頁、松原氏(前出)一二二頁、  
深井英五氏『國際法要論』二九〇頁以下、  
Reinsch, Colonial Government, pp. 106-107.  
Westlake, International Law, pp. 134-135.